

文革期における張抗抗の創作活動

瀬 邊 啓 子

〔抄 録〕

文革期に公的に発表・出版された作品は、どのような経緯を経て発表・出版されたのであろうか。ここでは紅衛兵運動が終息し、文藝の出版が再開された1970年以降の作品の発表・出版状況について、知青でもある張抗抗の創作活動を概観してゆくことで、分析をおこなった。

張抗抗は父親が歴史問題を抱え、母親も文革期に隔離審査を受けていたこともあり、出身家庭がよくなかった。それでもなお文革期に作品が発表できたのは、1つには豊かな読書量に支えられた文章力、もう1つには文革以前から上海の有力な編集者と知り合いであったことが挙げられる。さらに彼女が働いていた農場も、彼女の創作活動に関して適度に無関心であったことも功を奏した。これらの条件により、張抗抗は編集者の直接の指導を仰ぎながら、文革当時の文藝政策に見合った作品を創作することができ、文革期において作品発表の機会を得ることができたのである。

キーワード 文革、張抗抗、作品、発表、知青

1. はじめに

プロレタリアート文化大革命（以下、文革）は、中国の文藝にとっては特殊な時期と言える。よく知られているように、この時期の文学は出版など公的な形での発表が可能であった作品群⁽¹⁾と、公的には発表されなかったものの手抄〔手書き、手で写す〕などの手段により流通した作品群⁽²⁾があった。後者は楊健『文化大革命中の地下文学』（朝華出版社、1993）や『中国知青文学史』（中国工人出版社、2002）により、さまざまな作品が知られるようになり、「地下文学」という名称も定着してきた。

前者の公的に出版・発表されていた作品を見てみると、その特徴は「“文革”期に公開発表された小説・詩・戯劇、その藝術経験も、主に5,60年台の“主流文学”から来ている」⁽³⁾とされ、

ある種の“样板”と呼称される模範の確立が求められた。その模範的な作品として見なすことができるのが、上海県《虹南作戦史》写作組『虹南作戦史』（上海人民出版社、1972.2）と南哨『牛田洋』（上海人民出版社、1972.2）である。前者は集団創作という形態を取りつつ、“三結合”の見本を示した作品である。

しかし文革期の出版状況は一定していたわけではなく、3つの段階で捉えられることが多い⁽⁴⁾。ここでは文藝の出版事業が事実上途絶えた1969年と、労農家庭出身の作家の活動が再開され、仇学宝『金訓華之歌』（詩集、上海市出版革命組、1970.8）が出版された1970年以降に大きな差異があることに着目し、1966年から69年までと、1970年以降の2つの段階に分けて簡単にその特徴を見てみたい。

まず66年から69年は、66年7月から始まった文藝誌の停刊に加え、文藝従事者の農場・工場・部隊への参加によってできた文藝の空白状態に対し、いわゆる紅衛兵文学に見られる政治宣伝の文藝が形成されたことが特徴として挙げられる。紅衛兵文学は勇ましく、粗野な言葉を用いた詩歌を中心とするが、そのスタイルはさまざまである。特に67年以降は中高生の紅衛兵のなかでロマン主義の風潮が起こる⁽⁵⁾。これは当時の政治方針と相反するものであったが、彼らの複雑な内面を示すものでもあり、その後の知青文学や地下文学の発展を促す要素ともなった。しかし紅衛兵運動が終息するや、紅衛兵文学も一旦幕を閉じる。

1970年になると労農家庭出身の作家の活動が再開する。71年11月『北京新文藝』（『北京文藝』を改名）の復刊以降、文藝雑誌の復刊が始まるが、出版そのものは70年8月には仇学宝の詩集『金訓華之歌』、71年9月に『向陽列車』（小説散文集、上海人民出版社）が出版されており、70年ごろから徐々に文藝作品の出版が再開されていた。陳思和『中国当代文学史』では71年9月13日の林彪の墜落死を出版再開と結び付けているが、71年3月15日から7月22日まで行われた「全国出版工作座談会」、および1972年が毛沢東の文藝講話発表三十周年にあたるということを考慮すると、出版事業の再開準備を行っているその最中に、林彪のいわゆる“9・13事件”が起きたと考えるほうが妥当である。

では70年以降の文学はどのようなものであったかという点、前述したように『虹南作戦史』に見られる“三結合”の模範的作品が主流となる。72年5月には浩然『金光大道』第一部（人民文学出版社）が出版され、続く73年には上海人民出版社から“上海文藝叢刊”として『朝霞』など4輯が出版されると、四人組の文藝への影響が明確になってくる。

このころになると、新時期文学で活躍する作家の活躍が見られ始める。蔣子龍や韓少功、鄭万隆、古華などがそうであり、また知識青年（以下、知青）の書いた小説や詩歌も発表の場を与えられるようになってくる。

ここでいくつかの疑問が浮かび上がってくる。それは文革期とくに70年以降に作品を発表できたのはどのような人たちであったのか、そしてどのような作品であれば発表が可能であったのだろうか、ということだ。しかしこの疑問を解き明かすことは容易ではない。それは文革期

の作品については、作家の文集に収録されないことも多いからだ。そのことについては作品のレベルが低いという判断もあるのだろうが、文革期の創作状況や作品発表の状況が語られることがあまりないことも関係している。つまり文革期の創作そのものが忌避されている傾向があるのだ。このような作家が多いなか、知青小説でも知られている張抗抗は散文のなかで文革期の創作活動をつまびらかにしている。

本論では、張抗抗の散文を読み解き、彼女の文革期の創作活動を概観することで、文革中とくに70年以降に活動のできた作家、また発表のできた作品とはどのような作品であったのか、その一端を探ってゆく。

2. 張抗抗の家庭環境

文革期は血統や階級が人の運命を大きく作用したことを鑑みて、まずは張抗抗の家庭環境を見てゆくことにする。

張抗抗は1950年7月3日、杭州市に生まれた。祖籍は広東省新会である。小学校に上がる1957年、妹嬰音が生まれた。妹張嬰音は現在児童文学のジャンルで活躍する作家である。

張抗抗の父親については、『張抗抗影記』（河北教育出版社、1998）では彼女が生後6カ月のときに記者がやって来て、省報仁德里宿舍のベランダで軍服のような幹部服を着た父親と写真を撮ったということ⁽⁶⁾、その後何十年か父親の姿がアルバムに掲載されていないことが述べられているのみである。ただし『張抗抗影記』などの散文を見ると、幼少期には杭州茅家埠都家花園に住んでいたこと、父親の「歴史問題」が生じたことが分かる。

張抗抗の両親については、張抗抗の長篇小説『赤彤丹朱』（人民文学出版社、1995）に描かれているという。もちろん本人は「自伝ではない」⁽⁷⁾としているが、自分自身の形成には両親が大きく関わっており、そのなかで母親——本名朱蠶仙、のちに朱小玲に改名し、さらに金路・海虹・為先といったペンネームを有する人物に焦点をあてて書いたとも述べ⁽⁸⁾、『赤彤丹朱』を参照すれば両親の経歴をうかがい知ることができるようになっている。さらに『西湖』（2008年第11期）に楊振華「張抗抗：徳清外婆家」という散文が発表されたことで、張抗抗の両親の経歴がより明確になった。ここで両親の経歴に関して、『赤彤丹朱』と「張抗抗：徳清外婆家」を合わせて見てゆくことにする。

張抗抗の父親張白懷⁽⁹⁾は9歳のときに、父張老明に随って広東から上海へやって来た。家は裕福ではなかった。張老明は新会の田舎の農民であったが、上海に出て来てからは“恒源行”という広東のフルーツ輸出入などを行っていた店の店員として働いていた。

張白懷は11歳になると、粵幫水果行業公会が設立した聯益義務小学校に通うようになったが、戦争勃発の影響を受け、16歳でようやく小学校を卒業した。家計を助けるため、“恒源行”の徒弟となったが、小説や文章を書いては投稿していた。『正言報』等に短文などが掲載される

ようになると、『大衆茶座』（『正言報』副刊のコーナー名）のペンクラブ会員となり、編集部に入入りするようになる。

1941年11月末上海を離れ、42年春に浙西の『民族日報』に入り、記者として活躍した。44年初秋に徳清洛舎小鎮を訪れ、鎮長であった朱春谷の家へやって来た。このとき張抗抗の母親となる朱為先⁽¹⁰⁾と知り合った。彼女は養女ではあったが、小学校卒業後、湖州師範や浙西一中に学ぶ機会を得ていた。当時徳清のような田舎では彼女のように教育を受け、新思想に触れている女性は珍しかった。そのため彼女は徳清のなかでは異色の存在であったという。張白懷は徳清を離れたあとも、杭嘉湖遊撃区などを取材しなければならなかったため、朱為先とは『民族日報』社で落ちあって、ともに皖南へ行く約束をした。

1945年2月、張白懷は報国の思いから、自主的に「知識青年従軍運動」に申請・参加した。このことが後の「歴史問題」となったのである。抗日戦争に志願して参加したことがどうして「歴史問題」とされたのだろうか。それは知識青年従軍運動⁽¹¹⁾が、国民党政権が国統区において三青团主催で行った運動だったことに起因する。三青团とは三民主義青年団という国民党青年組織の略称である。つまり張抗抗の父親は自ら進んで国民党の組織した運動に参加したことになるのだ。その動機が愛国的であろうと、救国の思いであろうと、国民党の兵役政策に進んで飛び込んで行ったという事実は変わらない。結果として、このことが張抗抗一家に影響を及ぼすことになったのである。

このころの張抗抗の母親は、張白懷が従軍したことから、彼とは落ち合うことができなくなった。そのため上海法政学院で学ぶため、一人で皖南屯溪に行ったのである。

1946年には、張白懷も軍を辞め上海に戻り、中国新聞専科學校に進学した。このころに中国共産党の地下党に入ったのである。このとき張抗抗の両親は互いに連絡するすべを失っていた。しかし朱為先は学校の上海移転にともない、上海へやって来た。そのときたまたま購入した『大公報』の副刊に掲載された散文「雪之谷」に張愷之⁽¹²⁾の名を目にし、急いで新聞社の編集部を訪ね、彼の住所を教えてもらったのである。こうして張抗抗の両親は再会したのだった。

1948年春、杭州で張抗抗の両親は正式に結婚した。張白懷は結婚後解放区に行く予定であったが、組織が杭州に残って地下工作をさせることを決定した。そこで『当代晩報』の総編輯となり、同時に地下活動を行うようになった。1949年以降は『浙江日報』の特派員をしていた。

1952年、張抗抗の父親は国統区の地下党での活動期間、つまり知識青年従軍運動に参加した期間が原因となり、スパイ嫌疑などの審査を受け、党から除籍され、新聞社を離れることになった。その後、この「歴史問題」について上訴し続けることになる。

1965年、郊外の果樹園での労働を経て、杭州に戻るも、「問題」解決にいたっていなかった。そのため、道路修理の臨時工をするほかなかったのである。

張抗抗は小学生のときに少年先鋒隊大隊長であり、中学入試の成績⁽¹³⁾もよかったが、父親のこの「歴史問題」が影を落とし、重点中学である杭州市第一中学への進学希望が叶わない

可能性があった。ところが張抗抗が通っていた紫金觀巷小学校校長とクラス主任が彼女の名前が入学者から消されたと知るや、杭州市第一中学へ赴き粘り強く交渉を行った。彼らの尽力により、1963年張抗抗は杭州市第一中学に無事に入学することができた。

しかし中学では「一般労働人民」出身が占める初一(6)クラスになり、ロシア語を学ぶことになった⁽¹⁴⁾。入学したばかりのころは、クラスの文体委員で、全校の作文大会では連続して賞を取るも、中学二年のときに「中学生登記表」に両親の政治状況を書いたことで、状況が一変する。1966年に、杭州市第一中学(現在の杭州高級中学)を卒業した⁽¹⁵⁾。このころすでに文革が始まっており、張抗抗は先生たちが批判されるなか中学三年生のひと時を過ごした。

文革当初、紅衛兵の腕章を付けたことがあったものの革命にほとんど参加することなく、家にあったロシア文学やソ連の文学を読みふけていたという。ではどうして文革中“出身不好〔出身がよくない〕”という家庭とされた張抗抗の家に外国文学の書物が残されていたのだろうか。これは父親の歴史問題が早くに起こったことが幸いして、文革中に“抄家〔家探し〕”に遭わなかったことによる⁽¹⁶⁾。

張抗抗はやることもないなか、「工農兵登上舞台了!」という文章を『紅衛兵報』に投稿すると、それが掲載された。それを契機に、『紅衛兵報』の記者として活動することになった。張抗抗は「“文革”中的杭州一中」という散文のなかで、高校三年間という時期を浪費したことや、「文革」がさまざまな「汚点」を残すことになったことを素直に述べ、「青春に悔いなし」とは言えやしないとしている。

張抗抗の母親の両親は前述したように実の両親ではなく養父母ということになる。その両親も先祖代々の浙江の人という訳ではなく、養母の系譜は江蘇省の丹陽にあるというが、実際はよく分かっていない。『赤彤丹朱』によると、張抗抗の母親は1923年唐家の三番目の娘として生まれたが、家では育てられないと捨てられるところを朱家に引き取られたという。1943年に逮捕されたときには、長兄である唐梓良が進んで朱家に申し入れて、保釈金を払いに天目山までやって来たというのだから、唐家との関係も悪くはなかったようだ。

張抗抗の母親が9歳のころに、朱家では家の前に捨てられていた男の子を朱景勇と命名し養子として迎えた。養母は張抗抗の母親を女性らしく裁縫や刺繍で生計を立てられるようにしようとしたが、彼女は口実をつけてはそれを断り、『西遊記』や『西廂記』、果ては張恨水の『啼笑因縁』(1929)といった本を読みふけた。そこで養母は丹陽の実家の田圃を少し売って、湖州に勉強に行かせる費用とした。湖州師範への進学のものち、1年ほどたったところで戦争が始まり家に戻ったが、養父が彼女を浙西天目山の浙西一中へ行かせることを決めたため、浙西一中で勉学を継続することになった。在学中は学生演劇に参加するほか、『民族日報』副刊に文章を発表するなど目立った存在であった。またこのころ張抗抗の母親は友人の影響を受けて、中国共産党に入党した。しかし入党後、党を離れている⁽¹⁷⁾。

1940年夏、朱小玲に正式に改名した。その後養父の手配で小学校の教師をするようになり、

子供たちに抗日の歌を教えていた。42年、浙東金華地区へ赴き、朝鮮義勇隊へ参加した。そのとき国民党の目から逃れるためという意味もあり、金路に改名した。朝鮮義勇隊の解散もあり、43年6月義勇隊を離れるが、金銭面の問題で故郷へ一旦戻ったときに逮捕された。

張抗抗の母親は1943年に逮捕されたことがあったことで、政治的な嫌疑がかけられ、68年から71年に「歴史問題」で隔離審査を受けたが、その結論は出なかった。もともとは父親とともに『浙江日報』で働いていたが、張白懐が党を除籍になったあと、中学校の教師となった⁽¹⁸⁾。それにより母親は一生を教師という職にささげたが、若かりし頃は児童文学の作家でもあった。そのため2003年に浙江省作家協会から表彰もされている。

母親は腹を立てると、ベッドでグリム童話やイソップ物語などの本を読んで、声を出して笑っていたという⁽¹⁹⁾。張抗抗もこれらの童話を読み聴かせてもらっている。

張抗抗は母親の隔離審査をきっかけとして、『紅衛兵報』の記者を辞めた。1969年、徳清県洛舎人民公社の陸家湾大隊で3カ月すごしたのち、6月に自らの意志で北大荒の農場に“上山下郷”する⁽²⁰⁾。“上山下郷”の初期には、北大荒には出身のよい者しか行けなかったが、張抗抗が行くころにはこの条件は緩和されていた⁽²¹⁾。結局、黒龍江省鶴立河農場で8年間働くことになった。この間の72年より作品を発表し始め、77年に黒龍江藝術学校編劇専業に入学した。79年に卒業した後、黒龍江省作家協会に配属される。一級作家であり、中国作家協会副主席でもある。

このように張抗抗の家庭環境としては、父親の出身は農民・労働者階級と言えるが、1952年に共産党から除籍されることになった「歴史問題」が影を落としていた。一方、母親も生みの親は貧困層と言えるだろうが、育った家庭は農作物を作る土地を持つ地主でもあり、商売をしている資本家でもあり、大資本家ではなかったとは言え、出身階級がよいとは言えなかった。さらに1943年に逮捕された経験から、文革中に隔離審査を受けることにもなった。つまり両親ともに問題を抱えていたのである。

この点から見ると、文革期においては、張抗抗一家は不遇な立場に置かれても不思議ではない状況にあった。しかし上述したように父親の歴史問題が早期に起こったことが、張抗抗一家、とくに張抗抗にはかえって幸いした。しかも張抗抗は名目だけとはいえ、紅衛兵の腕章を付けたこともあり、「天安門広場での紅衛兵への接見に参加し到北京へ行く資格はなかった」⁽²²⁾ののだが、紹介状に手を加えて、毛沢東が1966年に行った第8回目であり、最後でもある紅衛兵への謁見⁽²³⁾にも参加しているのである。

このように両親の問題があるにも関わらず、中学進学に見られるように「評価をしてくれる」人々の援助を受けることで、張抗抗は両親の問題の影響をそれ程大きくは受けずに過ごしてきたことが窺われる。ではそんな張抗抗が文革中にいかに作品を発表し得たのだろうか、以下に彼女の創作状況を追って見てゆきたい。

3. 張抗抗の創作状況

3.1. 文革前夜——1970年以前

『張抗抗影記』には張抗抗が3,4歳のころから詩を創作して、母親に詠んでいたというエピソードが紹介されており、早くから「創作」への意識が高かったことを窺わせている。小学5年生のときには、上海の『少年文藝』に「我們学做小医生」という文章を発表している。この文章は、張抗抗たちが紅領巾小医院を開設したことを書いたものであるが、この文章が発表されると、編集部から10元の原稿料が送られてきたという⁽²⁴⁾。張抗抗はこのときの編集者から手紙を受け取っており、そこにはおごってはいけないとのアドヴァイスもあった。この編集者が児童文学の作者でもある任大霖⁽²⁵⁾であった。張抗抗がこの任大霖に対して、「永遠にわたしの文学の道の指導者」⁽²⁶⁾と述べるほど、任大霖と知り合ったことは大きな意味を持っていた。

文革が始まると、「工農兵登上舞台了！」を『紅衛兵報』に投稿すると掲載された。その後、『紅衛兵報』にいくつかの文章も掲載された。張抗抗は文章が掲載されると、文章を書くことに「才能がある」と感じ、文章を書くことに熱狂してゆく。そして処女詩「你只有16歳」を発表するが、この詩は張抗抗が唯一発表した詩となる。半年ほど、『紅衛兵報』の記者となったが、母親の隔離審査により、家事の負担がかかるようになったため、“文革”のさまざまな出来事に興味を失くしてしまう。

3.2. 文革期の創作——1970年以降

張抗抗が作家として活動するにあたって、彼女の読書歴は注目に値する。彼女の経歴のなかで挙げたように、張抗抗は母親からグリムやイソップ童話を読み聴かせてもらったり、ロシアやソ連文学などを読んでいた。杭州を離れ“上山下郷”したときには、ファージェーエフ『若き親衛隊』(1945)を持って北大荒へと向かった⁽²⁷⁾。また『張抗抗影記』のなかでも、文革期には家から農場に『中国通史』を持って行って読んでいたことや、杭州へ“探親〔帰省)”をしたときにスタンダール『赤と黒』(1830)やバルザック『ゴリオ爺さん』(1835)、プーシキン『エヴゲーニイ・オネーギン』(1825-32)などの世界的名著を読んだことを述べている。これらの本は張抗抗の両親が彼女のためにでき得るかぎり借りて来た本であった⁽²⁸⁾。文革期の特殊な環境のなかで、これだけの読書ができたというのは、両親の努力のたまものとしか言えない。これらの読書体験が「作家」張抗抗の創作に、間違いなく影響を与えているのである。

張抗抗が作家としてスタートすることになったのは、“上山下郷”中の創作に端を発する。彼女は農場に“封、資、修”として破棄されていた文学作品をいくつか持って来ていた。このときはすでに文学を志し、会話や人物の個性、天気などを書きとめたり、描写したりして、ひたすら文章力を磨いていた。1972年春に二分場の煉瓦製造所に異動となると、机を拾ってきて、自分の机とした。そこで両親を読者とした散文を書きつづっていた。

1972年夏、処女作「灯」を書きあげた。何度も修正をしたのち、文革前に誼のあった任大霖に送った。これは任大霖の意見を聴きたいというだけのものであったが、任大霖はストーリー・人物が整っている上に、言葉もすっきりしており、チャレンジ精神がある作品と判じ、『解放日報』の文藝部の編集者へと送った。結果として、「灯」は『解放日報』（1972年10月22日第四版）に掲載された。

張抗抗の処女作となった「灯」は、電機工の主人公小江が深夜に起こった照明が落ちるといふ事故を通して、党支部書記老高から教えを得るといふ一人称語りで書かれた小品である。文中には“用什麼來建設社會主義？〔何をもって社会主義を建設するのか〕”や“革命哪有那麼保險的？〔革命にどうしてそんなに危険がないというのか〕”といったセリフを入れ、社会主義建設や革命を推進するために人々がどのように行動すべきかということを示している。また毛沢東語録・教えの一節がゴシック体で示される文革以前からの表記方法を用いているだけでなく、劉少奇の否定・批判を入れ当時の政治状況を反映させている。タイトルの「灯」はまさしく「英雄」の存在と主人公の心に差す光明の象徴として用いられており、全体的に文革当時の模範的な作品という印象を受ける。張抗抗自身も処女作を読み返すと恥ずかしく、当時のイデオロギーの産物としている⁽²⁹⁾。

張抗抗にとって「灯」の掲載は小説創作への度し難い熱意となった。新聞への投稿だけではなく、知青生活の余力を全て創作へ向けることとなり、休みの日には山のなかに取材に行くなどしていた。ただし当時の社会状況ではおおびらに創作をするわけにもいかなかったため、張抗抗の創作活動は密に行われていた。

張抗抗が「灯」の次に発表したのは「大森林の主人」（『文匯報』1973年7月8日第四版）という散文である。これは大興安嶺⁽³⁰⁾の林場〔営林場〕の上海知青たちを描いたフィクションである。そのなかの“小螺絲釘”は“小蘿卜頭”という綽名の杭州の知青がモデルになっている⁽³¹⁾。その“小螺絲釘”がトラクターを延焼から守るために火災現場に飛び込んでいったことなどの自己犠牲的な行動を描くことで、一つの「英雄」像を示している。また彤彤と燕燕という二人の知青が成長してゆくさまを描き、彼女たちに「辺境の広い天地はわたしたちを必要としているの。より平凡な仕事でも革命事業と密接につながっているのよ」⁽³²⁾と言わしめることで、知青たちの労働に意味を持たせている。散文という形態をとってはいるものの、林場の掛け声をあげながら作業をする様子やそこに暮らす知青を含めたさまざまな人たちの様子が生き生きと描かれ、小説を読んでいるような印象を受ける。

この散文は張抗抗自身が休みを利用し林場に取材しに行ったとき、その場で書きあげた作品である。彼女は山から戻ると一度改稿し、その後『文匯報』に投稿した。すると『文匯報』編集者である周嘉俊⁽³³⁾から採用を考慮するとの返信が届き、掲載の運びとなったのである。

続いて「小鹿」（『文匯報』1973年11月25日第四版）を発表し、『文匯報』に二度掲載されたことで気をよくした張抗抗は文学に対する夢を膨らませていった。

ここで「小鹿」を見ると、数えて13歳の主人公小鹿が自分の快足を生かそうと、父に代わって新聞配達をするために飛び出してゆき、そこで出会った様々なことを描いた作品である。主人公が小学5年生のせい、児童文学を思わせるような「語り口調」の文体となっている。例えば、「おや、あれは何か、リスだ、なんてかわいらしいリスなんだろう」⁽³⁴⁾といった具合である。また文末にも「今日の話はここでおしまい」⁽³⁵⁾と書くことで、「語り物」を意識した構成となっている。そのため語り手が一人称、主人公が三人称でつづられている。

作品には当時の政治状況を反映したスローガンや林彪批判が盛り込まれ、さらに電線が切れたことで復旧に働きかけるというモチーフが用いられている。これらの点で処女作「灯」を思い起こさせるが、「灯」のような硬さは感じられない。ただし現在の視点から見ると子供が天真爛漫に「修正主義に反対し、修正主義への変更を防ぐためさ」、「みんながちゃんと（仕事を）引き継げば、毛主席は安心してくれるだろう」⁽³⁶⁾と話す様子は、文革当時のプロパガンダの要素を感じずにはいられない。

張抗抗が本格的に創作を始めた1972年は、知青が年に一度“探親”と呼ばれる帰省が可能になった年でもある。「探親“大補”」（『誰敢問問自己』所収）では、一度の帰省で半月、それに口実をつければさらに数日間休みを増やせたと述べられている。ただし張抗抗は72年冬には小興安嶺に、73年冬には場部文藝宣伝隊に、ほかの知青が旧正月に帰省したのに対し、いずれも春に帰省している。帰省したときには、上述の世界的名著のほかに『詩経』や『魯迅全集』などありとあらゆる本をむさぼり読んだという。「探親“大補”」にも、ディケンズにマーク・トゥエインなど上げればきりがなほどの作品を読んでいた様子が描かれている。これらの名著に惹かれながらも、“革命リアリズム”にも惹かれ、張抗抗の心中に「結局どのような文学作品が、ほんとうに優秀な文学作品なのだろうか。どうして目下の社会が認めているものと、わたしが内心好きなもの、2つの異なった基準があるのだろうか」⁽³⁷⁾とのジレンマを生むことになった。

これらの読書体験に加え、三作品を発表した段階で、張抗抗は“三突出”⁽³⁸⁾に則った「英雄人物」を書くために、中篇小説を書こうと決意した。北大荒の生活、浙江省の農村、海南島のことを書くなどの構想を練り、仕事の合間の15分休憩のときにも寸暇を惜しんで、ノートにメモを取っていた。そのような状況のなか、張抗抗の創作にとっては絶好の機会が訪れる。それは場部文藝宣伝隊でチャムスへ公演に出かけたときに、甲状腺嚢腫と診断され手術の必要性が生じたことから生まれた好機であった。

張抗抗は1974年春に手術・病気治療のために杭州へ戻ることになった。その途中、上海で列車の乗り換え時間を利用して、任大霖にそのとき着手していた小説の梗概を見てほしいとの依頼をしたのだ。すると任大霖は出版社で知青を題材にした小説創作の責任者であった謝泉銘⁽³⁹⁾を彼女に紹介し、併せて謝泉銘に指導を頼んでくれたのである。このときの梗概を見た、任と謝の二人は眉をしかめて、張抗抗が行ったことも見たこともない海南島のことを書いていることを指摘し、自分の熟知する生活を描くように指導した⁽⁴⁰⁾。さらにこのとき多くの知青業余

作家が筆を執っていること、出版社では長篇小説叢書を出版することを考えているところであることを教えられる。これを知った張抗抗はひそかに長篇小説に挑戦することを決意したのであった。

杭州に着いてから浙医二院外科へ入院し、手術をすることになった。早期の回復つまり一日も早く創作に取りかかるために、麻酔を頸部に直接注射する手術を選択している。腫瘍は陰性で、術後一週間で退院することができた。退院後、張抗抗は両親に小説の内容を相談し、海南島と浙江農村の知青は全て削除し、北大荒の部分のみを残し、さらに北大荒の知青に関する肉付けをすることと決めた。ストーリーの大幅な調整、構成のやり直しをして、さらに杭州一中のクラスメート洪曉白に手伝ってもらい、黒龍江省同江県の生産隊に行っている杭州一中の同窓生へのインタビューを行った。

張抗抗は農場に戻ると創作の時間がとれなくなること、さらには長篇小説を書いていることが知られるとどんなレッテルを貼られるか知れやしないということ、この二点を心配し、農場には戻りたくなかった。文革期は「一旦何かを書いていることが見つければ、書いているものが指導者から与えられた批判原稿の類を書くという任務でなければ、きっと疑われるか問いただされるだろう」⁽⁴¹⁾ という状況にあり、おおっぴらに文章を書くわけにはいかなかった。

しかし張抗抗は手術・病氣療養という大義名分が生じたことで、堂々と数か月の休暇をとることができたのである。もちろんこの間は給料も糧票⁽⁴²⁾ もなかったが、両親が創作・生活をサポートしてくれたため生活はできた。そこで農場に2ヵ月の休暇を申し入れたのであった。「《分界線》」（『誰敢問問自己』所収）のなかには、友人も彼女に創作に必要な空間を提供し、協力をしてくれたことも述べられており、周囲からの協力によって『分界線』の創作がなし得たことが窺える。

病氣治療の1ヵ月の間に構想していた作品は中篇から長篇に変わり、20万字以上の作品となった。謝泉銘に原稿を送るために、初稿を整理し、書き直しをしていた。その間に張抗抗は疲れからか高熱が続き、入院してしまう。張抗抗は母親に謝泉銘に事情を説明する手紙を送るよう頼んだ。その数日後、謝泉銘と上海人民出版社文藝編集室の編集者小陸が見舞いに来たのである。張抗抗はそのときやはり読書をしていたのだが、その姿が謝泉銘に強い感銘を与えた。このとき謝泉銘は張抗抗に原稿の話をするこもなく立ち去った。しかし張抗抗の母親に密かに頼んで、この書き上がった原稿を持ち帰り検討した。その結果、上海に戻ると、出版社の上役に報告ののち、農場に原稿の手直しのための「創作假〔創作のための休暇〕」を申請したのである。

張抗抗は退院後3か月に費やして、約30万字の第二稿を書き上げた。半月程して、知青創作叢書の責任編集者であった謝泉銘から「基礎はよし、手直し多からず」⁽⁴³⁾ との評語をもらい、1975年3月から7月の間は原稿の手直しのために上海へ行った。「《分界線》」によると、このとき謝泉銘と陳向明⁽⁴⁴⁾ が作業場所を提供し、二人の指導のもと一章ずつ改稿された。このよう

にして、たった1年で『分界線』(上海人民出版社、1975.9)が出版されることになったのだ。

責任編集者であった謝泉銘は『新民晩報』で『夜光杯』、『解放日報』で『朝花』、上海文藝出版社で『小説界』を編集しただけではなく、多くの文学の作者を育てたことでも知られている。王安憶や葉辛、王小鷹、汪雷など多くの作家が彼に育てられている⁽⁴⁵⁾。張抗抗もその一人で、謝泉銘との出会いがなければ、長篇小説としての『分界線』は生まれなかった。その出会いには、任大霖の存在が不可欠であった。その任が当時『朝霞』編集室の責任者であったことは注目に値する。『朝霞』は、1973年に上海人民出版社から出版された上海文藝叢刊の最初の4輯のうちの一冊のタイトルである。しかし翌年には上海文藝叢刊は『朝霞叢刊』と名称を変え、74年1月からは総合的な文藝月刊誌『朝霞』が発行される。この『朝霞』は四人組のコントロールを受けていたことで知られているように、四人組の意向を受けて上海の文藝界をけん引していたのである。

張抗抗は自身の文章能力や創作能力の上に、任大霖に代表されるような当時の文藝路線を支えていた編集者の直接的な指導を得られる状況にあった。このことはほかの作家ないし作家を目指している青年たちに比べると有利に働いている。それは当時の文藝政策を反映させた作品を編集者の直接的な指導を仰ぎながら作ることができたことである。その結果、上山下郷創作叢書の1冊として『分界線』を出版できたのである。

しかし二審・三審と問題なく通り10月⁽⁴⁶⁾に正式出版された『分界線』は、9月末にサンプル本ができたときに重大な政治問題が発覚したとして、印刷工場内で回収されることになった。問題になった箇所は“罌粟〔ケシ〕”という文言であった。張抗抗は北大荒の原野に咲くケシの花を描いたのだが、張春橋夫人が社会主義中国には麻薬として知られるケシがあるわけがないとして批判したと、謝泉銘が説明したとのことである⁽⁴⁷⁾。その結果、すでに印刷された分は“罌粟”の文字を“石竹”に置き換えるために、全て紙が貼られたという⁽⁴⁸⁾。この話は張抗抗に強く政治を意識させ、また「上海」がいかに人々の言説にまで影響を与えるのかということを考えさせることになった。

『分界線』のなかには当時の禁忌を侵している箇所があったが、よそ者の知青一人に注意を払うことも利用する価値もなかったので、四人組の批判にさらされることもなかったと、張抗抗は『《分界線》』(『誰敢問問自己』p.188)のなかで推測している。『分界線』は発行されると、人気を博し、全部で60万冊発行された。

『分界線』は知識青年耿常炯を主人公に、開墾地が洪水被害に遭ったことからその土地の水利戦略を進めようと人々が奮闘する物語である。彼の人物像は張抗抗の「理想主義」の産物⁽⁴⁹⁾とされるように、舞台となった北大荒伏蛟河をよくしようという熱意に溢れた青年で、まさに“三突出”で求められているような「英雄」的な人物と言える。上述したように『分界線』は最終的には謝泉銘と陳向明の指導のもと手直しが進められたのだが、張抗抗が『《分界線》』(『誰敢問問自己』p.186)で指摘をしているように、謝・陳両名も“三突出”が重要であることは

認識していたが、作中でどのように“突出”させるべきか分からない状態にあった。またこの兩名が極端な“左”の思想に立っていなかったことが幸いし、『分界線』は“三突出”の人物描写を探りながらも、それほど極端なイデオロギーを反映した作品にはならなかった。

耿常炯が弟を連れて、1973年春に再び伏蛟河に訪れる場面を描いた冒頭部だけを見ると、まだあどけない少年耿常翔が初めて訪れる北大荒で目新しいものに気を取られている様子がよく分かり、その様子から今後の生活に希望を抱いているという印象を強く受ける。また兄がその弟の質問や反応に応えるように着いてくるという描かれ方から、兄弟の仲のよさが伺え、非常に微笑ましい場面となっている。もちろんこの場面にも「鬭争」という言葉は出てくるのだが、これは『分界線』の一つのテーマであり、当時の文藝に求められていたものでもあった。

続く場面では、周朴書記と鄭京丹らの会話などから耿常炯のような青年に対する渴望感が窺えるようになっている。そこに耿常炯兄弟が登場するという仕組みになっているのだが、この登場がドラマティックになるように、冒頭部の兄弟の場面では二人の名前は語られない。その上で穴にはまったトラクターを動かすために人々が押しているところに、急に救いの神が下りたようにトラクターが穴から脱出し、不思議に思ってみてみると、そこにはみなが再訪を熱望していた耿常炯の姿があるという具合で描かれる。皆が困っているのを見ると、兄弟二人ともに何も言わずにトラクターを押してくれたのである。つまり最初から主人公は英雄として望まれて登場するのである。

耿常炯の父親は水利工事の現場で犠牲になった、ある種の「英雄」的な人物である。このように耿常炯の英雄性は父親の「死」によっても補強されている。また地区農業管理局が派遣した伏蛟河農場工作組長霍遷は耿常炯の排除を画策し、東大窪の水利工事をあれこれと口実をつけては邪魔をしようとする。彼女は周朴の目からは路線の誤った認識を持っているように映る。霍遷のような人物を登場させることで、物語に起伏を持たせ、また主人公たちの乗り越えるべき壁に厚みをもたせているのである。それでも耿常炯たちはくじけることなく、困難に立ち向かってゆくのである。

『分界線』というタイトルは張抗抗が父親と討論を重ねて決定したものである⁽⁵⁰⁾。このタイトルはマルクス主義と修正主義の間の“分界線〔境界線〕”や、社会主義と資本主義の“分界線”として、作中に相互の違いを強調するものとして用いられている。つまりこの差の強調こそが当時のイデオロギーの反映とも言えるのである。

『分界線』の出版には一応の反応があり、張抗抗にも創作談や座談会出席の依頼があった。張抗抗は『分界線』出版後の半年あまり、出版社に残ることになった。そこで謝・陳の兩名を手伝い、知青叢書のなかの散文集の編集をしていた⁽⁵¹⁾。そこで出版社の実習生のように、出版関係の知識を学んでいったのである。

この間上海に滞在したことが、張抗抗に良くも悪くも影響を与えることになる。張抗抗にプラスに作用したことは、「都市」の奥深さを知り、それによって様々なものを吸収したこと

である。1975年秋から翌76年初夏にいたるまで、編集作業と余暇の間の創作に打ち込んでいた。しかし文章を書いては破り、何を書けばよいのか分からなくなるほど悩むことにもなった。このころすでに上海での滞在が1年にもなっていた。当時の彼女は『分界線』を出版し、時代の流れに乗って成功を納めたものの、それゆえ時代に流されてゆくことにもなったのである。

1976年4月、天安門事件が起こった。張抗抗は上海人民出版社の伝達会議に参加したものの、天安門事件の真相は隠べいされ、何も知ることはできなかった。「上海」という政治宣伝が狂ったように行われている空間では、張抗抗には中国が一体どんな状況なのか把握ができなかったのである。しかし北大荒の農場の知青数名から、上海では知りえない情報を伝える匿名の手紙を受け取った。手紙を受け取ると、すぐさま出版社から追い出されるかのように出てゆくことになった。張抗抗は76年5月に上海を離れ、一旦杭州に戻ったのち、北京に数日間立ち寄り。そのとき北京のおじの家で、彼女は知青や噂などから天安門事件の真相を知ったのである。そして6月下旬に、黒龍江省鶴立河農場に戻って行ったのであった。

現在、張抗抗は文革期の創作を振り返って、『分界線』を「文学」としてではなく、ある種のイデオロギーの道具であり拡声器だったとしている⁽⁵²⁾。ほかの知青たちや作家たちがこの時期の創作への言明を避けるなか、張抗抗がこの時期の創作の発表・出版をつまびらかにしているのは、この時期の創作が張抗抗自身に与えた影響も大きかったからである。彼女にとって、処女作から『分界線』の出版に至るまでの道筋は非常に順調なものであった。しかしそれは本来の「文学」そのものの軌道からは逸脱したものであり、それがゆえに彼女は『分界線』発表以降、悩み、もがき続けることになった。それは1978年冬に「愛的権利」(『収獲』79年第2期)を書くまで続くことになった。社会の変化に戸惑い、思いまどい、苦勞して文学の「正道」とも言うべき創作に戻った。その経験から、張抗抗は文革期の創作に関して、反省を込め、また自分たちの払った犠牲を見つめ直すため、言及をし続けているのである。

4. おわりに

文革期は、仕事や批判書を書くこと以外で文章を書いていることが見つければ、批判を受ける可能性があった。そのような社会にあって、文学作品を発表することは容易ではなかった。そのころは個人の創作した作品も発表・出版されていなかったわけではなかったが、集団創作という形態を取り、「個」を消し、政策や政治に彩られた作品が多く発表されていた。しかし新時期文学で活躍する作家たちの多くは、この時期「地下文学」と呼称される公的な発表・出版の手段を持たない、自由な創作を行っていた。ところがその一方で、70年代以降には作品を公的に発表・出版をしていた作家たちもいたのである。その違いはどこにあるのだろうか。

現在も知青小説で活躍する張抗抗は出身家庭が決してよい訳ではなかった。しかもそのことが中学進学にも影響を及ぼしそうになったほどである。“上山下郷”していた鶴立河でも、“二

「労改」⁽⁵³⁾に10元を貸したとして批判大会にかけられたこともあった。また彼女の出身階級が周囲にも知られていたことは、「大字報」（『誰敢問問自己』所収）に述べられるように郵便物を濡らした報復に大字報を貼られ、「出身がよくない、彼女の父親は歴史反革命で、母親は今も隔離審査にあり、“黒五類”に属することは間違いない」⁽⁵⁴⁾と書かれたことから分かる。しかし張抗抗も一方的な批判を素直に受け入れることはなく、この大字報にペンを揮って反撃を行ったのである。

張抗抗は両親ともに文筆家と言え、家には書物がたくさんあった。そのためか張抗抗も幼少のころから文章を書く、創作をするということに長けていた。それは家庭環境に加え、豊富な読書量に支えられていたと言える。大字報への反撃もさることながら、張抗抗は文革前から文章を書いて投稿し、雑誌に掲載されるという経験があり、文章を書く力量に優れていたと言える。

文革が始まる前に文章の投稿・掲載という経験があったことは、張抗抗が文革期に作品を発表できたことと大いに関係している。それは文革期の上海にあって重要な地位を占めていた編集者と知遇を得ていたことである。その編集者こそが任大霖であり、その任は雑誌『朝霞』編集室の責任者であった。この任大霖の紹介から謝泉銘と知り合い、さらには上山下郷知識青年創作叢書の出版が企画されていることを知るのである。

この叢書の1冊として出版されたのが長篇小説『分界線』である。この出版の背景には、張抗抗にとって有利な条件がいくつかあった。まず病氣療養で杭州へ戻ったことで、創作の時間を十分に持つことができたことである。さらには出版社からも創作のための休暇願が出され、編集者たちの直接的な指導を受けながら創作にあたれたのである。また張抗抗の働いていた農場側も、農場に戻るよう促したりもせず、給料を出して出版を支持することもなく、彼女には適度に無関心な態度を取っていた。つまり協力も妨害もなく、一介の知青が作品を創作・出版をすることには何ら大きな障害がなかったのである。その上、両親を始めとする創作のサポートしてくれる周囲の人にも恵まれ、張抗抗の創作環境は比較的整っていたと言える。

張抗抗は上海人民出版社編集部に出入りし、知青散文集の出版の手伝いを無償で行っていたことから、編集者との関係が良好であったことが窺える。『分界線』はある意味では張抗抗と編集者謝泉銘・陳向明の共同創作と言える。その点から言うと、張抗抗を核とした集団創作とも考えられる。つまり文革中の公的な創作には、完全な個人による創作は決して多くはなく、「編集者」の介在があり、その編集者いかんによって作品の方向性が決められた。『分界線』の場合、謝・陳の両名が“三突出”の表現方法に迷いがあり、かつ極左的ではなかったため、イデオロギー色一辺倒の作品にはならなかったのである。

しかし張抗抗にとって『分界線』の成功は、『分界線』が文革期のプロパガンダ作品の一翼を担ったこともあり、自分も政治宣伝の加害者であり、かつそのような作品を生む思考を強要された被害者としての意識を生むことになる。それゆえに文革の呪縛から脱するのに時間を要

し、多くの作家が文革期の創作に口をつぐむことに反して、自己の文革期の創作過程をつまびらかにしているのである。

ここでは張抗抗の散文を中心に、文革期の作品の発表・出版状況を見てきた。ここから編集者の観点・役割が非常に重要であることが見てとれる。張抗抗『分界線』では謝・陳の二人によって“三突出”の表現を試行錯誤されながら、一章ずつ改稿されており、彼ら二人の政策に対する考えが反映されている。つまり編集者の回顧録などを通して、当時の編集者たちの政策判断や状況を分析し、作品の発表・出版状況に関する編集者の観点も探る必要があるのだが、この点については、今後の課題としたい。

〔注〕

- (1) 岩佐昌暉『文革期の文学』（花書院、2004）では、「体制に公認された出版物の形で流布した文学」（p.4）とし、これを「公然文学」と呼称している。陳思和『中国当代文学史』（復旦大学出版社、1999）はこれを“公開文学（作品）”（p.165）としている。
- (2) 岩佐昌暉『文革期の文学』では、「回覧や手抄、手紙などの形で個人やごく狭いグループ間で流布した非公然の文学」（p.4）とし、楊健『文化大革命中の地下文学』（朝華出版社、1993）に倣って「地下文学」とする。陳思和は『中国当代文学史』では“潜在写作”（p.174）、火木『光荣与夢想』（成都出版社、1992）では“禁品”（p.389）など様々な呼称がある。
- (3) 原文は「“文革”公開發表的小説、詩、戯劇、其藝術經驗、也主要来自五六十年代的“主流文學”」（洪子誠『中国当代文学史 修訂版』北京大学出版社、2007、p.166）。
- (4) 陳思和『中国当代文学史』では、66年から71年、71年9月13日の林彪の墜落死から74年末、75年1月の全国人大四回会議で周恩来が“4つの現代化”を掲げてから以降の3つの段階に分けている。岩佐昌暉『文革期の文学』では、1966年から69年を混沌期、70年から71年を始動期、72年から76年を展開期として3つの段階に分ける。
- (5) 楊健『中国知青文学史』参照
- (6) 『張抗抗影記』pp.3,4、参照
- (7) 原文は「非自傳」（『西湖紅海洋』『誰敢問問自己』時代文藝出版社、2007、p.18）。『西湖紅海洋』はそのほとんどが長篇小説『赤彤丹朱』の引用となっている。『誰敢問問自己』は《老三屆著名作家回憶錄》叢書として出版された『大荒冰河』（吉林人民出版社、1998）を2006年に修訂した作品である。
- (8) ここでは『赤彤丹朱』（作家出版社、2009）の冒頭部を参照した。
- (9) 『赤彤丹朱』によると、張抗抗の父親は張其儒という名前から後に張愷之に改名した。白懷、丁傷、亦漂萍など多くのペンネームを持つ。
ここでは「張抗抗：徳清外婆家」の表記に従った。
- (10) 本名は朱慧仙、幼名を信珠という。1939年、浙西一中で学び、ロシア文学を読んではあちこちでそのストーリーを語って歩いていたことがきっかけで、小玲と呼ばれるようになり、小玲に改名。42年、朝鮮義勇隊に参加したころに、金路と名乗っていた。
ここでは「張抗抗：徳清外婆家」の表記に従った。
- (11) 「知識青年従軍運動」は、日本軍の進軍を受け、1944年10月11日から14日に行われた「發動知識青年従軍運動會議」を受けて、同10月14日に正式に發動された運動である。同時に全国知識青年志願従軍指導委員会が成立し、その委員会の主任兼委員を蔣介石が務めた。（江沛「戦時知識青年従軍運動述評」『抗日戦争研究』2004年第3期、参照）
- (12) 注9、参照。

- (13) 張抗抗「“文革”中的杭州一中」（『誰敢問問自己』所収）によると、市で最も高い平均点を取った。
- (14) 張抗抗「“文革”中的杭州一中」によると、このクラス以外の5つのクラスは英語を学習していた。当時は中ソ関係が悪化しており、ロシア語のクラスになるということは主流をはずれることを意味した。この中学校は幹部の子弟が通う学校でもあり、華僑の子女やヴェトナムからの留学生がいたという（「“文革”中的杭州一中」『誰敢問問自己』 p.19、参照）。
- (15) 張抗抗は多くの知青同様中学卒となる。
- (16) 『張抗抗影記』（p.26）では、1966年文革が始まると、紅衛兵の“抄家”を恐れた両親が家のなかの書籍を“供批判用”と書いた封を貼った大きな木箱に避難させていたことが述べられている。
- (17) 「張抗抗：徳清外婆家」参照。しかし「張抗抗：徳清外婆家」にはこの辺りの経緯は述べられていない。『赤彤丹朱』には母親の中共入党そのものに、複雑な経緯があったことが述べられている。
- (18) 「緊扣時代的脈搏」『你是先鋒嗎？』（張抗抗編著、文匯出版社、2002）p.163、参照
- (19) 『張抗抗影記』 p.21、参照
- (20) 1969年5月杭州に黒龍江省合江地区五大農場が知識青年の募集にきた。政治条件もゆるかったため、陸家湾を密かに離れて、杭州まで応募に行った。しかし張抗抗の父親は黒龍江へ行くことに反対だった。（『我要去遠方』『誰敢問問自己』 p.35、参照）
- (21) 「緊扣時代的脈搏」『你是先鋒嗎？』 p.166、参照
- (22) 原文は「沒有資格去北京參加天安門廣場的紅衛兵接見」（「“文革”中的杭州一中」『誰敢問問自己』 p.27）。
- (23) 張抗抗は8月18日に行われた毛沢東の紅衛兵接見の十周年記念に文章を寄せている（「征途在前」『人民文学』1976年第5期）が、「“文革”中的杭州一中」（『誰敢問問自己』 p.27）では毛沢東の最後の接見に参加したと述べている。またその日付を1966年10月28日としている。『大荒氷河』でも同様の日付を挙げている。しかし『你是先鋒嗎？』のインタビューのなかで、毛沢東が最後に行った接見が11月の25日か26日だとの指摘を受けて、張抗抗は日付の間違いを認め、機会があれば訂正するとしている。『誰敢問問自己』は『大荒氷河』を修訂（注7参照）したものであるが、この点は改められていない。
- (24) 『張抗抗影記』 p.23、参照
- (25) (1929.7 - 1995) 児童文学者。蕭山城廂鎮生まれ。1947年浙江省立杭州師範学校へ入学し、文藝社団活動に加わる。そこで児童文学の創作を始める。1949年7月、杭州青年幹部学校に参加し、中国新民主主義青年団浙江省委員で働く。53年8月に共産党に入党。10月に上海へ異動し、出版事業に関わるようになる。少年児童出版社の編集者や『少年文藝』の主編などの職を経る。56年、中国作家協会に入る。70年代には『朝霞』編集室の責任者となる。文革後は上海文藝出版社文藝編集室主任となり、80年8月に少年児童出版社に戻り、編集・審査を行った。89年、少年児童出版社総編輯となり、『少年文藝』・『児童文学選刊』・『巨人』などの雑誌の主編をする。（中国作家協会会員辞典編輯室編『中国作家協会会員辞典』作家出版社、2009・汪柏遂主編『可愛的蕭山』浙江人民出版社、2000など参照）
張抗抗「延安西路1538号——懷念任大霖恩師」（『中国教育報』2004.8.21第四版、原載は雑誌『中華少年写作精選』〔年、期不明〕だが未見）によると、文革の始めのころ中学生であった張抗抗が訪ねていったときに、任大霖は審査を受けているところだったという。
- (26) 原文は「永遠是我文學之路的導師」（『張抗抗影記』 p.23）。
- (27) 「処女作」『誰敢問問自己』 p.168、参照
- (28) 『張抗抗影記』 p.49、参照
- (29) 「処女作」『誰敢問問自己』 p.170、参照。ただし幸いなことに極“左”的ではないとも述べている。
- (30) 「処女作」『誰敢問問自己』（p.172）では“小興安嶺”と表記。ここでは「大森林的主人」の表記に従う。
- (31) 「処女作」『誰敢問問自己』 p.172、参照

- (32) 原文は「邊疆的廣闊天地需要我們，再平凡的工作也和革命事業緊緊相聯」（『文匯報』1973.7.8第四版）。
- (33) (1934-)浙江省鎮海の人。中国共産党員。上海『労働報』記者や上海電影制片廠文学部編集、『文匯報』記者を経る。1950年代に作品を発表し始め、作家としても活動をしている。80年に中国作家協会に加入。（中国作家協会会員辞典編輯室編『中国作家協会会員辞典』作家出版社、2009参照）
- (34) 原文は「哎，那是什麼，小松鼠，多好看的小松鼠呀」（『文匯報』1973.11.25第四版）。
- (35) 原文は「今天的故事就講到這兒結束了」（『文匯報』1973.11.25第四版）。
- (36) 原文は「為了反修防修唄！」「大家都接好班，毛主席就放心了」（『文匯報』1973.11.25第四版）。
- (37) 原文は「究竟什麼樣的文學作品，才是真正優秀的文學呢？為什麼當前社會的認可，與我內心所愛，是兩種不同的標準？」（『探親“大補”』『誰敢問問自己』p.177）。
- (38) 文革期の極左文藝の“文藝憲法”で、人物描写の指針としての「全ての人物のなかで正面人物を突出させなければならない。正面人物のなかでは英雄人物を突出させなければならない。英雄人物のなかでは主要な英雄人物を突出させなければならない」（于会泳「讀文藝舞台永遠成為宣伝毛沢東思想的障地」『文匯報』1968.5.23）という3つの突出を指す。
- (39) (1927 - 2000.4) 浙江省紹興の人。中国共産党員。ペンネームに矚野がある。1950年、上海大同大学文学院史地系を卒業した。華東軍政委員会文化部戲改處幹部、文藝處秘書、上海市文藝工作委員会秘書、上海市委員宣伝部秘書、『新民晚報』・『解放日報』副刊の編集、上海文藝出版社文学編集、編集・審定を経る。1990年、中国作家協会に加入する。（中国作家協会会員辞典編輯室編『中国作家協会会員辞典』作家出版社、2009、参照）
- (40) 『《分界線》』『誰敢問問自己』p.182、参照
- (41) 原文は「一旦如果發現你在寫點什麼，而寫的又不是領導交給你的寫批判稿之類的任務，那肯定是要被懷疑和詢問的」（黃新原『五十年代生人成長史』中國青年出版社、2009、p.190）。
- (42) 1953年10月19日に政務院が「關於實行糧食計劃供應」を公布し、それを受けて55年（早い地域で53年）から80年代（地域によっては94年まで。多くの地域では90年前後まで発行）になるまで発行された穀物や穀物の加工品購入に使用されたチケットを指す。お札のように額面がある。また家族の人数・構成などに応じて、配布される額が変わった。（白少川『北京糧票簡史』煤炭工業出版社、2000・草千里編『中国糧票図鑑』湖南大学出版社、2001など参照）
- (43) 原文は「基礎較好，改動不大」（『張抗抗影記』p.51）。
- (44) (1921.6 - 1989) 本名、陳寿萱、またの名を陳子英、陳黎州という。福建省閩侯蘇坡村の人。上海の啓秀女中で学んでいる間、1939年5月に中国共産党に入党。45年10月、中共上海大学区委員会の委員になる。47年10月29日、浙江大学学生自治会主席于子三が獄中で殺害されると、杭州で学生運動が起こった。これを受けて、48年1月に中共杭州工作委員会書記となり、学生運動を指示した。表向きは杭州弘道女中の歴史の教員であった。49年3月、中共杭州市委員会（地下）が成立すると、杭州市委員会委員兼青年工作委員会書記となり、主に学校での任務を担当した。解放後は、上海少年兒童出版社副社長兼総編輯を担当していたが、59年に右派とされてしまう。78年に名誉回復し、その後は上海少年兒童出版社副社長兼総編輯を担当。（張抗抗『《分界線》』『誰敢問問自己』p.185、「浙江省杭州第十四中学知名校友——陳向明」<http://www.chinaxq.com/html/20098/n208135313.shtml> [2010年9月24日アクセス] など参照）
- (45) 江曾培「祭奠謝泉銘有感」（<http://pinglun.eastday.com/p/20100403/ula5126851.html> [2010年9月11日アクセス]）参照
- (46) 『《分界線》』（『誰敢問問自己』p.186）に拠る。『分界線』の奥付は9月であるが、実際の出版と奥付の日付にはずれが生じていることが多い。
- (47) 『《分界線》』『誰敢問問自己』p.187、参照
- (48) 上海商務印刷廠の印刷した第1版第1次印刷を確認したが、当該箇所は確認できなかった。

文革期における張抗抗の創作活動（瀬邊啓子）

- (49) 原文は「“理想主義”的產物」（『《分界線》』『誰敢問問自己』 p.186）。
- (50) 『《分界線》』『誰敢問問自己』 p.185、参照
- (51) 『《分界線》』『誰敢問問自己』 p.190、参照。散文集は“上山下鄉知識青年創作叢書”として1975年2月に出版された『大汗歌』と推測されるが、不明。
- (52) 『《分界線》』『誰敢問問自己』 p.188、参照
- (53) “刑滿留場就業人員”のこと。つまり労働改造犯として刑を受けた者が、刑期を終了しても農場に残り、そのまま働き続けていると、“刑滿留場就業人員”と呼ばれるのだが、知青たちが俗称として“二勞改”と呼んでいた。
- (54) 原文は「出身不好，其父是歷史反革命，其母尚在隔離審查，屬“黑五類”無疑」（『大字報』『誰敢問問自己』 p.75）。

（せべ けいこ 中国学科）

2010年10月12日受理